

社会情報学会 (SSI) 東北支部 研究発表会

■日時：2015年3月14日(土) 14:00～18:30

■場所：新潟大学駅南キャンパス「ときめいと」(講義室 B)

(新潟駅南口より徒歩3分「プラーカ1」2階)

■共催：新潟大学現代社会文化研究科「地域メディアに関する総合研究会」プロジェクト、新潟デジタル・メディア研究会

【プログラム】

14:00 開会

14:05～14:50 研究発表(1)

臨時災害放送局の役割に関する考察——東日本大震災を事例として——

大内齋之 (新潟大学大学院現代社会文化研究科博士後期課程1年)

14:55～15:40 研究発表(2)

写真に写る「心」と「声」——明治初頭の写真受容——

榎本千賀子 (新潟大学人文学部)

15:40～15:50 休憩

15:50～16:35 研究発表(3)

データはひとにやさしい

阿部由紀江 (オープンナレッジファウンデーションジャパン会員)

16:40～17:25 研究発表(4)

オープンデータ化を介した自治体広報の多元化

本田正美 (東京大学大学院情報学環 交流研究員)

17:25～17:35 休憩

17:35～18:20 研究発表(5)

アメリカと日本の放送における教育概念

志柿浩一郎 (東北大学大学院情報科学研究科 博士研究員)

18:30 閉会

※ 各研究発表の時間は、発表が30分、質疑応答が15分、合計45分となっています。

※ 研究発表会終了後に懇親会を行います。

会場：「若旦那」(tel:025-243-5900) 午後7時～ ☆会場から歩いて5分程度

会費：実費(当日、会場で徴収します。)

※ 「懇親会」の出欠についてご連絡ください。

■問い合わせ先：

e-mail: ssi-tohoku-info@human.niigata-u.ac.jp (担当：新潟大学大学院・大内齋之)

【報告要旨】

研究発表(1)

臨時災害放送局の役割に関する考察——東日本大震災を事例として——

大内斎之（新潟大学大学院現代社会文化研究科博士課程後期 1 年）

東日本大震災にともない、臨時災害放送局が岩手、宮城、福島、茨城の 4 県で 30 局開局した。その後は状況によって閉局もしくはコミュニティ FM と移行した。しかし 2015 年 2 月 28 日現在で、いまだ 11 局が臨時災害放送局として運用を続けており、運用日数は 11 局すべて 1000 日を超えている。臨時災害放送局は、臨時であり、一時的な放送局で、「被害の軽減」が主な開局目的である。しかし現在は、各放送局の放送内容を概観すると、震災直後のような緊急避難や被害の軽減につながるような放送内容とはかけ離れていることがわかる。そこで臨時災害放送局が「被害軽減」から「復興支援」というこれまでとはちがった局面を迎えているとし、本稿ではそうした局面に対して、番組を通じて住民に復興への当事者意識を促す機能を担っているとの仮説を設定した。事例として岩手県、宮城県、福島県 4 局として、運用担当者へのインタビューや番組内容を概観して実証的に考察する。

キーワード：東日本大震災、臨時災害放送局、30 局、長期化、復興支援、

写真に写る「心」と「声」——明治初頭の写真受容——

榎本千賀子 (新潟大学人文学部)

幕末に日本に伝えられた写真技術は、明治に入ると広い階層と地域に普及し、生活の多様な局面で活用されてゆく。本発表では、写真術の普及期において、写真や新聞記事、文芸作品等に現れた、「心」と「声」を写す写真という定型的なイメージに注目し、日本における初期写真受容の様相を考察する。

「心を写す写真」は、写真術が、江戸期の黄表紙等における西洋光学機器の描かれ方や、「心学」などの民衆思想を参照しつつ、文明開化と近代化を象徴する技術として受容されていたことを示している。

一方「声を写す写真」は、静止像である写真像が、「声」や「動き」を記録する欲望を喚起していたことを示している。一見するとこの「声を写す写真」が示す欲望は、蓄音機等の後続メディアを予見するかのようにも思われる。だが、実際の後続メディアへの反応と比較すると、「声を写す写真」は後続メディアによって記録されたものとは異なる「声」「動き」を志向していたと考えられる。

キーワード：写真、庶民文化、心学、蓄音機、下岡蓮杖

データはひとにやさしい

阿部由紀江（オープンナレッジファウンデーションジャパン会員）

「電子行政オープンデータ戦略」が策定された 2012 年前後から、我が国においてもオープンデータ活用推進の動きが始まり、その取り組みは広がりを見せ活発化しています。

発表前半では、オープンデータ関連の取り組みの現状を、現在のオープンデータのあり方をかたち作ってきたオバマ大統領覚書や Open Knowledge Foundation による Open Data Handbook などに照らして整理し、見えてきた課題について考察します。

後半では「Historypin」活用を例に、より多様な人々の参画から生まれる活動に期待される効果から、オープンデータ推進のありかたについての意見を提起します。

キーワード：ヒストリーピン、オープンデータ、協働

オープンデータ化を介した自治体広報の多元化

本田正美（東京大学大学院情報学環 交流研究員）

行政が保有するデータを自由に二次利用可能な形式で公開するオープンデータの推進が世界中で広がっている。2015年2月21日には、インターナショナルオープンデータデイと銘打たれ、世界中でオープンデータを活用したアイデアソンやハッカソンが開催されている。日本でも、日本政府だけではなく、自治体においても、オープンデータの推進が広がりを見せ、インターナショナルオープンデータデイには関連イベントが全国各地で開催された。

そのような中で、自治体広報紙オープンデータ推進協議会は、自治体広報紙のオープンデータ化を進め、「マイ広報紙」の実証研究を行っている。この広報紙のオープンデータ化については、東京オープンデータデイ 2014 やさがみオープンデータデイ 2015 でメインテーマとして取り上げられたところである。

本研究では、この自治体広報紙オープンデータ推進協議会の取り組みを参照しながら、自治体広報紙のオープンデータ化が自治体広報の多元化に資することにつき議論を行いたい。

キーワード：オープンデータ、自治体広報紙、自治体広報、広報の多元化

アメリカと日本の放送における教育概念

志柿浩一郎（東北大学大学院情報科学研究科 博士研究員）

本報告者は、これまでアメリカの公共放送史および日本の放送史の研究を進めてきた。両国とも放送の教育的機能に注目し、教育的番組を放送してきた。しかし、それぞれの国においてその内実は大きく違い、教育放送の捉え方も異なる。この考え方の違いが、それぞれの国における放送メディア界の発展に大きな影響を与えている。

本発表では、後に公共放送組織へと発展するアメリカの大学放送局および教育放送局設立の経緯を概観するとともに、これまでの日本の教育放送の歴史を辿る。そのことで、アメリカおよび日本の放送史において、教育あるいは教育放送がそれぞれ、いかに位置付けられてきたかを明らかにし、今日の放送メディアの状況と教育放送をめぐる思想の間に、いかなる関係があるのか報告する。教育放送に関わる日米の考え方の違いを検証することは、知識・情報社会における情報発信やメディアのあり方を検討する上で極めて重要である。

キーワード：教育放送、放送、アメリカ、日本、高等教育